

子育て支援活動における音楽の役割

—個と集団のかかわりを育む機能と作用—

The Role of Music in Child Care Support Activities
—From the Viewpoint of Function and Action Creating the
Relationship Between Individuals and Groups—

山原 麻紀子* 田尻 さやか**
YAMAHARA Makiko, TAJIRI Sayaka

要旨

本研究では、子育て支援活動の一環として実践されている就園前の2～3歳の子どもたちを対象とした集団活動において、音楽がどのような役割を果たしているのか、事例分析を通して考察した。その結果、「個と集団の相即的發展」を基本理念とする集団活動における音楽の役割、その機能と作用について以下のように整理した。

- ①音・音楽によって空間を演出することで、子どもたちのイメージや動きを引き出すとともに、場面設定および活動展開を促進する。
- ②ともに同じ歌を歌う遊びを通して、ゆるやかなつながりを生み出し、同じ旋律の繰り返しによって安定した気持ちで活動が展開され、関係性の発展や拡大を促進する。
- ③音楽を通して、イメージの共有と動きの共振の経験を積み重ねることで、他者とのつながりを深め、集団活動の充実を促進する。
- ④音楽の演奏と鑑賞という役割をそれぞれが担いながら協働して一つのものをつくりあげる活動によって、個と集団の相即的發展を促進し、文化的実践へのつながりを生み出す。

キーワード：子育て支援 就園前 集団活動 音楽 個と集団

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo University, Faculty of Human Life Design

**東京家政学院大学現代生活学部児童学科 Tokyo Kasei Gakuin University, Faculty of Human Life Science

1. 背景と目的

今日、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、遊び場や遊び仲間の減少、直接的体験の減少など様々な問題が取り上げられている。また、核家族化や地域社会との関係の希薄化に伴い、子育てに対する不安や困難感の顕在化が大きな問題となっている。人間関係の体験が積みれにくい今日の環境から、生活の中で集団と個人がよりよくかかわっていく体験をいかにつくるかが課題とされている。近年では、子育て支援センターや子育て支援事業が増加し、その内容は大きな広がりを見せている。親同士で子育てに関する情報交換や不安を共有できる場、あるいは子ども同士がかかわりあう場、さらに親子が共に楽しめる場が求められており、とりわけ就園前親子に向けた広場型子育て支援事業や園庭解放、プレ保育、公開講座等が数多く展開されている。親子参加型の子育て支援実践に目を向けると、音楽に関連する活動が目立つ。その内容は多岐にわたるが、小松原・福田・萩原 (2017)、中村・丸田 (2017)、安藤 (2019)、松本 (2011) に報告されているように、リトミックを中心とした音楽あそびや、わらべうたあそび、あるいは親子参加型の音楽コンサートやワークショップなどが多く実践されており、継続的なプログラムよりも一回完結型のものが中心となっている。石川・大沼 (2009) は、保育・子育て支援における乳幼児を対象とした表現活動の実践事例の分析を通して、声や音でやりとりし、リズムや動きをとともに感じたりすることが、養育者と子どもの間のかかわりを育む上で重要であり、幼児期には身体表現を仲立ちにしたかかわりあいから、双方向性をもって豊かな想像力に裏打ちされた表現の往来がひらかれることを指摘している。活動のねらいは様々であるが、いずれの活動も親子のふれあいを大切に、身体を動かしながら音楽表現を楽しむことが大事にされていることが読み取れる。

以上のように、就園前の子どもの対象とした音楽活動は様々に実施されており、その意義や効果についても研究の蓄積がみられる。しかしその一方で、音楽を通して育まれる他者との関係性について着目した活動報告や研究は少ない。就園前という対象年齢が0歳（あるいは胎児）から3歳が中心であるため、親子で一緒に楽しむという視点は欠かせないものとなるだろう。しかし、特に2～3歳という発達段階を考えると、これから家庭以外の初めての社会・集団と出会い、関係を育んでいく非常に重要な時期であるにもかかわらず、青山 (2014, 2015) や渡邊 (2018) が指摘するように、子ども同士のかかわりや他者とのかかわりから生成された音楽表現に焦点をあてた研究や、音楽によって育まれる他者との関係性について省察した研究は非常に少ない。改めて、子ども同士あるいは子ども—保育者—親のかかわりという視点、さらに個と集団のかかわりという視点から、音楽の持つ役割について考える必要があるのではないだろうか。

一般的に「個」と「集団」は、あらゆる場面において二項対立的に捉えられがちである。集団指導に重点をおくと、個々の表現や課題が見えにくくなったり、反対に個に焦点化すると、集団性が希薄になることもある。保育において一人ひとりを受け止めながら集団をみる、あるいは集団をみながら一人ひとりへの配慮をする、というのは必要不可欠なかかわりであるが、決して容易なことではない。個と集団をとともに活かし合う集団活動のあり方が求められると言えるだろう。特に2～3歳の時期は、徐々に関係性を広げ、小集団での活動へ参加していくプロセスにおいて、子ども同士あるいは子ども—保育者—親のかかわりといった、個と集団のかかわりがより一層重要となる。本稿では、この個と集

団のかかわりを、「関係学」に基づく集団指導の基礎理論¹から考える。その集団指導の根源的な原理は「個と集団の相即的發展」である。すなわち、一人ひとりが伸びることにより集団全体が発展し、集団全体が発展することにより一人ひとりが伸びていくことが大切にされている。人・モノ・コトのはじめての出会いから集団が形成され、集団の指導者の多様なかかわりによって活動内容も関係性も発展していく。吉川（2010）は個と集団の相即的發展を促す指導者の役割について、「方向性機能：集団活動の方向を明らかにする機能」、「内容性機能：集団活動における子どもたちの自発活動を促進し内容をつくっていく機能」、「関係性機能：集団活動において、人との関係、コーナーとの関係、場面、方向との関係など、さまざまな関係の発展を促進する機能」の三つの機能を把握し、これらの機能が充分にはたらくようにかかわっていくことが必要であるとしている²。

一方、個と集団の側面から音楽について考えると、もともと音楽には、他者との関係を自然と生み出し、個と集団のかかわりを育む力がある。アンサンブル等の複数で奏でる音楽は分かりやすい例だろう。また近年、幼児教育の分野でも音楽のもつ「他者との関係を育む」あるいは「かかわりの中でこそ表現が深まる」という側面への注目が高まっている。本来、音・音楽を感受するのは個人的で主観的な行為であるが、他者とのかかわりによってイメージや意味づけが変化し、表出・表現にも変化が現れる。また音を介したコミュニケーションによって他者との関係性も発展していく。このような、親子・子ども同士での音や声を介したコミュニケーションや、リズムに合わせた身体の動きの同期、といった視点で改めて幼児の表現をみると、音楽を通して育まれる人間関係の広がりがみえてくるのではないだろうか。では実際、個々の音楽的感受や表現が、どのように子ども同士のかかわりを生んでいるのか、また、どのようにして他者へ広がり、集団としての活動発展につながるのか、音を介してかかわりが育まれるプロセスや共有過程について丁寧に検討することが必要である。

以上の問題意識から、本稿では、子育て支援の一環として実践され、個と集団の相即的發展を促すことを目指した親子参加型集団活動を取り上げ、集団活動の展開過程および発達段階に注目し、子ども同士あるいは子ども—保育者—親のかかわりという視点、さらに個と集団のかかわりという視点から、音楽の持つ役割や、その機能や作用について事例分析を通して考察することを目的とする。また、それぞれの段階に即した音楽活動のあり方について、個と集団の相即的發展をもたらす三つの機能「方向性機能」「関係性機能」「内容性機能」に着目し、それぞれの場面で音楽が果たしている機能と作用について検討する。

2. 研究方法

（1）観察対象の概要と音楽活動の位置付け

本稿で観察対象とする親子参加型集団活動とは、就園前2～3歳の子どもとその親、および複数名の保育者（リーダーチーム）によって構成され、上述のように「個と集団の相即的發展」の活動原理に基づいて展開されている。東京家政学院大学における子育て支援の一環として地域に開いた親子参加型の保育活動で、1987年から開始され、今年32年目を迎えた。近隣の親子が1年間連続して計20回の活動に参加する。大学内のプレイルームを活動場所として、複数の教員、学生のリーダーチームによって運営されている。参加人数は年によって異なるが、平均して親子10～15組、学生10～15名、教

表1 L1、L2、L3 役割の原理

	L1 (リーダー1)	L2 (リーダー2)	L3 (リーダー3)
方向性機能	集団活動の全体を捉え、活動の方向を明らかにする		
内容性機能		コーナー活動における子どもたちの自発的活動を促進する	周辺的にいる子どもに即して動き、自発的活動を促進する
関係性機能	コーナー間の関係発展を促進する場面設定、役割付与をする	子どもたち同士の関係が発展する役割付与、場面設定をする	子どもと他コーナーとの関係、全体状況との関係の発展をはかる

員2～4名である。筆者らは、教員として活動に参加している。

ここでは、複数の教員・学生が保育者としてかかわっており、「個と集団の相即的發展」を促す集団の指導者として、上述した三つの機能「方向性機能」「関係性機能」「内容性機能」を把握し、その機能が充分にはたらくようにかかわっていくことが必要とされている。本活動のように、指導者（保育者）が複数いる集団活動においては、役割「L1（リーダー1）・L2（リーダー2）・L3（リーダー3）」を決め、表1のように三つの機能を担い合いながら、人との関係、モノとの関係、全体との関係等を促進することを意図して集団状況にかかわり、集団活動が発展していくようにチームを組んで活動をつくっていく。

活動の枠組みは、1回90分（10時30分～12時）の活動中、全員参加の合同活動が前半と後半に20分～30分程度行われ、さらにその間に親・子どもそれぞれのグループ（親グループ・子どもグループ）に分かれて行う分化活動とで構成される。活動に際し、前の週までの集団全体の状況をとらえ、発達段階と特質を考慮しながらL1を中心に作成された指導案をもとに、合同活動の内容および各分化活動の内容について、活動前に改めてリーダーチームで話し合いをもつ。表2では、1年間を通して展開される合同活動の内容と活動例を集団の発達段階に即して例示する。

全20回の活動において、音楽的要素は積極的に取り入れられている。リーダーチームにおける音楽担当者を毎回決めており、L1および教員と相談しながら内容・方法・環境設定を考えている。毎回の合同活動において、「おはようのうた」「おかえりのうた」をピアノに合わせて参加者全員で歌うほか、季節や活動内容に合わせた音楽を取り入れている。歌唱だけでなく、身体表現活動や、音楽に合わせて小物楽器や手づくり楽器を用いる表現活動のほかに、活動に合わせた効果音や即興演奏も取り入れられている。合同活動において音楽表現を主活動として行うことは稀で、あくまでも集団活動の円滑な展開を支えるように意図されている。

（2）観察の期間と方法

＜期間＞：2017年度（2017年5月～2018年1月）、週1回（90分）、年間20回実施

＜対象＞：就園前の2～3歳の子どもとその親13組、学生15人、教員2名、補助員1名

＜活動場所＞：東京家政学院大学内ブレイルーム

毎回、1～2名で活動記録が取られ、同時に活動全体が見渡せる3カ所からビデオ録画によって記

表2 合同活動の実践内容例

発達段階	活動の目標	活動内容	活動例
集団成立期	○共通基盤活動	○集団のなかに安定する場所を見つける	●プレイルームの中の探検（※1）
	自分とお母さん	○出会い ○つつまれて遊ぶ	●布を使ったあそび ●音楽(歌、ピアノ)につつまれる ●「こんにちは」「さようなら」遊び
集団形成期	○役割活動	○働きかけ働きかけられて変化を楽しむ	●ラディッシュの栽培(種まき・水やり・収穫)
	自分たちとお母さん	○媒介物を使ってのやり取り遊び	●「むっくりくまさん」などやりとりあそび ●新聞紙やきびがら、小麦粉粘土を使った遊び ●お花紙を使ったおふろごっこ、お店作り ●ロープ、フープを使って電車ごっこ ●布を使って大波、小波ごっこ
集団発展期	○課題活動	○生活縮図的な場面を楽しむ	●ままごと、パーティーごっこ、レストラン遊び、温泉ごっこ、病院ごっこなど生活縮図の場面
	他集団の確認	○場面の必要に応じてふるまう ○課題場面への対処尾工夫をする	●「あぶくたった」などわらべうたあそび（※2） ●「火事だ」「地震だ」「交通事故だ」「病気だ」「おばけだ」の事件 ●動物のもののまね遊び、まねっこゲーム ●夏休みなど体験の発表
集団拡大期	○場面活動	○役割分化(観客、演者)やりとりを楽しむ	●段差や大型積み木を生かした遊び、山遊び、円台の島遊び
	他集団との発展	○場面の目的を見通して行動する ○場面全体を理解してふるまう	●舞台を生かした映画館、レストラン、電車 ● <u>ごっこ遊びの中での簡単な役割をとる「売り手」「買い手」、音楽会の「演者」「観客」、絵本・紙芝居、劇をみる</u> （※3） ●「海で泳ぐ」「雨が降ってきた」「不思議の国のタコが躍りだす」などの空想全体場面 ●木の葉や木の実をつかった制作遊び
集団統合期	○統合活動	○簡単なきまりをいかして遊ぶ	●おにごっこ、かくれんぼ
	他集団との機能的交流発展	○役割を選択し、分担して遊ぶ ○空想場面で創造的にふるまう	●おみせやさんごっこ、のりものごっこ(旅行に行く、車内販売)（※4） ●積み木で動物園づくり、遊園地、街づくり ●展覧会遊び、看板づくり遊び
集団転換期	○成果共有活動	○場面に必要な役割を創造する	●ペープサートづくり、舞台で披露する
	融合集団における関係操作	○場面に必要なものを想定する	●段ボールを使った街づくりなど大きなものを皆でつくる ●夜から朝までの遊び ●行事活動

録されている。分析にあたって、当日作成された観察記録と、ビデオによる録画記録を合わせた文字データから音楽に関係するエピソードを抽出した。子どもの名前はアルファベットと合わせて男児・女児と表記し、保育者（リーダー）は役割に合わせてL1～3で表記した。囲み線内には活動時間を記入した。なお、データについては、毎回、活動後にリーダーグループによる討議を行い、それぞれの視点からの見解や、保護者による振り返りシートの記述も含めて検討し、データのトライアングレーションを図った。

（３）分析の方法

本稿では、親子が一緒に参加し、学生や教員が指導者（リーダー）となってかかわる合同活動の取り組み全20回を、集団の発達段階で①集団成立・形成期、②集団発展期、③集団拡大期、④集団統合・転換期の四段階に大きく分け、各段階の活動における音楽的表現に関する事例を取り上げる。各事例中における音楽的要素に関する箇所を抽出し、それぞれが子ども同士あるいは子ども—保育者—親のかかわり、さらに個と集団のかかわりにおいてどのような役割を果たしているのか考察する。また、音楽の機能と作用について個と集団の相即的發展を促す三つの機能「方向性機能」「関係性機能」「内容性機能」の視点からも考察を行う。事例中には、音楽的要素に関する箇所を下線で示し、括弧付で小文字アルファベット（a、b、c、～）を付した。また保育者（リーダー）のかかわりや、子どもの様子、他者とのかかわりについての分析箇所を点線で示し、括弧付で番号（1、2、3、～）を付した。

（４）倫理的配慮

本活動の参加者には、観察目的を口頭で説明し許可を得た上で、観察と録画を行っている。また研究のためのデータ使用についても事前に書面にてその目的と倫理的配慮の事項を伝え、承諾を得ている。

3. 事例の検討と考察

（１）事例１【プレイルームの探検】

全20回の活動の第1回目～第3回目にあたり、集団の発達段階では①集団成立・形成期にあたる（表2 ※1を参照）。プレイルームという新しい場所・空間を探検し、部屋の様子を知ると同時に友だちやおもちゃと出会い、集団のなかに安定する場所を見つける活動である。ここでは2017年5月25日の事例を取り上げる。

11:00 L 1「今日はこのお部屋の探検をしてみようかな」L 2「何か乗り物にのって出発しようか」L 3「何に乗ろうかな」と言いながら、電車や飛行機、車など思い思いに真似をする。ピアノ演奏による《線路はつづくよどこまでも》に合わせて、それぞれ乗り物をイメージしながら部屋の中を反時計回りに歩いて移動する (a)。母親と一緒に慎重に歩く子どももいる。音の動きが細かくリズムカルな部分になると、少し駆け足や、動きが活発になる (b)。L 2「快速電車です！」に合わせて一緒に電車になって走る親子がいる1(1)。L 1「トンネルくぐってどんどん行こう！」と声をかける。円の外側で見ているK男児と一緒に「ここにピッとしてください」とL 3が改札をつくる (2)。

11:05 ゆったりした曲調《おはながわらった》の前奏が聞こえてくる。L 1「ひろばについたみたい！」L 2「風がふいてきて気持ちいいね」「お花も咲いているね」L 2・3が二人一組でシフォンの布を広げて上下にゆっくり揺らす。大きな声で「きゃー」とジャンプしながら喜ぶ様子や、母親と手をつなぎながらゆれる布をじっと見つめ興味を持つ様子がみられる(3)。3箇所ひろがった色違いのシフォン布の下を次々と走り抜ける子どもや、布に触ろうとジャンプする子どももいる。床に転がっているところに布が顔のところまで降りてくる。穏やかな曲調に包まれて安心しながら布がつくる風や、布が手や顔にふれる触感を楽しんでいる (c)。三段舞台の上からL 3「おーい」と呼びかける。L 2「あ、お山があるみたいだね、いってみようか」子どもたちと一緒に舞台へ向かう。L 2「気持ちいいね。やっほー」と声を出すと「やっほー」と真似をする子どももいる(d)。

11:10 L 1「そろそろおもちゃのあるお部屋に帰ろうか」L 2「じゃあまた乗り物にのって帰ろうか」と再び《線路はつづくよどこまでも》に合わせてテンポよく歩く(e)。L 3「トンネルをくぐったらお部屋だね。」音楽の終わりに合わせてL 1「ついたみたい！」と伝え、次の活動にうつる(4)。

事例1では、活動の展開に応じて、音楽を変化させている。使用楽器はピアノが主で、楽曲は既存の曲を選択した。探検に向かうところは、軽快な足取りに合うようなテンポやリズムで、子どもたちが耳にしたことのあるような曲を用いた。この時は《線路はつづくよどこまでも》(詩：佐々木敏、曲：アメリカ民謡)を選択した。子どもたちに馴染み深いことと、G-Dur(ト長調)の快活な雰囲気が活動内容に合致していると考えたからである。また、途中の付点リズムが多用される中間部分で音楽に変化をつけることで、小走りやスキップ、ジャンプなど、動きの変化を促すのに適していると考えた。子どもたちが環境に慣れ始めると、探検の途中で広場や、花畑、山などの場面や空間を音楽で演出し、場面に合わせた雰囲気をつくる。ここでは、ゆったりと穏やかな曲調である《おはながわらった》(詩：保富庚午、曲：湯山昭)を用いた。F-Dur(ヘ長調)という広大な雰囲気を持つ安定した調性によって、はじめての集団の中でも音楽に包まれて安心できる場であると実感することにつながると考えた。

子どもたちは保育者や親と一緒に探検する中で、ピアノのリズムに合わせて歩き方やスピードを変化させたり(b、e)、保育者が提示する「乗り物」「快速電車」「風」といったイメージを膨らませ、そのイメージにあった動きを楽しんでいる(a、c)。まだ保育者や他の親子とも出会ったばかりで、かつ十分に慣れていない場所・空間であるため、子ども同士のかかわりはあまり見られないものの、

保育者が「やっほー」と声を出すのも真似する子どもや (d)、保育者のかかわりによって音楽の変化を感じ取り親子で楽しむ様子や (1)、まわりの様子を親子で観察したりする姿がみられる (3)。また、周辺の参加の子どもには、保育者がつながりをつくっていく (2)。活動の終わりは音楽の終わりに合わせて示されている (4)。ここでは、保育者が方向性を示しながら場面をつくっていくことを音楽によって支え、その場面にあった空間を演出したり、状況のイメージを促進することで、協働して活動を深めている。本事例において音楽は特に「方向性機能」と「内容性機能」を担っていると考えられる。

(2) 事例2【わらべうた遊び】

年間20回の活動も中盤の②集団発展期に入ると、集団内の交流も活発になり、イメージや役割を持ったやりとりを楽しむようになる (表2 ※2参照)。やりとりを楽しむ集団遊びとして、複数回にわたりわらべうた遊びを行っている。①集団成立・形成期から少しずつ要素を取り入れつつ、様々な遊びと並行して、複数回にわたってわらべうたを用いた集団遊びを行う。《あぶくたった》は、輪になって食べ物を煮たり味見をしたり、できあがった料理を棚の中にしまったりする伝統的なわらべうた遊びである。2017年度は、計4回、《あぶくたった》を実施した。1回目と4回目の事例を取り上げる。

1回目 (2017年6月1日)

10:50 朝のご挨拶、お名前呼びが終わり、L1「大きくなってみようか」をきっかけにお隣と手をつないで大きな円になる。L1「今度は小さくなるよ。お友達の顔みえるかな?」と小さな円になる。さらに小さな囁くような声でL1「もっと小さくなってみようか」といい、円の状態で大きくなったり小さくなったりを繰り返す (5)。つづいてL1「ジャンプをしてみようか」「とまれー」「小さくジャンプしてみよう」に合わせて全員が思い思いのタイミングで動く。L1「次はカニ歩きできるかな?」にあわせて円になって時計回りにゆっくり回る。L2「破けてないかな?」と確認しながら隣と手をつないで回る。L1「大きなお鍋ができたね!」L2「ご飯なにつくろうか」の問いかけにA男児が「カレーライス!」という。L2・3が3人、鍋の真ん中に出てきて、体を丸めたり腕を上げたりして肉や野菜などの具材となる。L1「魔法の歌があるからね、みんなと一緒に歌ってみようね」といって、つないだ手を前後にふりながら「あぶくたったーにえたーにえたかどうだかたべてみよう」とゆっくり歌い始めると、親・リーダーも一緒に歌う (f)。はじめこの歌を耳にする子どももいる。活動の途中で手を離し、円の外側にいたM男児も歌が始まると視線を向ける (6)。少しずつカニ歩きで親・リーダーと手をつなぎながら円になって動く。

10:53 L1「もう煮えたかな?味見してみよう」といって具材役に近寄り、「むしゃむしゃむしゃ」頭や肩を触って食べる真似をして「まだだね。もう少し煮てみようか」という。子どもたちもLの動きを真似て、具材役に触る (7)。同じ旋律で繰り返しながらやり取りを楽しんだのち (g)、L2「今度こそ煮えたかな?確かめてみよう」というと、H男児に続いてY男児、C女児も具材役に進み寄り、むしゃむしゃと食べる真似をする。L1「もうできたみたい!じゃあみんなでたべてみよう」といって今度は全員でむしゃむしゃと食べる動きをする。

4 回目 (2017年11月16日)

10:55 L 1「先週、みんなでカボチャのプリン作ったよね。今日もまた作ってみようか」、L 2「プリン食べたいな」「楽しみだね」といって、カボチャのプリンを作ることが決まる。具材役の3人のリーダーがカボチャ役になり身をかがめて小さくなる。C男児がリーダーのもとへ行き同じようにカボチャになる(8)。母親の手を引いてカボチャに近づく子どももいる。円になりL 1「おいしくなるあの歌を歌おう!」つないだ手を前後に振って拍を取りながら「あぶくたったー」と歌い始めると、皆も歌いながら回りはじめ、声がそろっていく(h)。砂糖や牛乳を加えて混ぜるしぐさをする。「にえたかどうだかたべてみよう」のところで、輪の中心に進み寄り、むしゃむしゃむしゃと食べるしぐさをする。H男児やY男児がむしゃむしゃむしゃの場面になると笑顔で具に近づき、食べるしぐさをして「まだまだ」と答える(9)。L 2・3「まだおいしくないね、もう一度煮てみようか」と輪に戻るように促す。また一節歌い、L 1「もう煮えたかな?」という、数名の子どもが味見に近寄ってくる。具材になっているC男児が「まだー」と大きな声でいう(10)。もう一度「あぶくたったー」と歌い、最後にL 1「できあがったみたい」にあわせて、笑顔で味見をする子どもたち。

11:03 L 1「戸棚にしまっておこうか」と完成したカボチャプリンを三段舞台へ移動させる。「がちゃ がちゃ がちゃ」と鍵をかけるしぐさをする(i)。H男児が何度も鍵をかけようとする(11)。L 1「お部屋へかえろう」と伝える。「お風呂入って、着替えて、ドライヤーで髪を乾かして、布団を敷いて、歯磨きして、寝よう」と寝るまでの様々なしぐさを楽しむ。リーダーをみながら子どもたちもしぐさを真似する。

11:06 カボチャプリンになっていたリーダーが鬼役となり、「トン トン トン」というと、子どもたちは鬼の方をみる。L 1「何の音?」、L 2「なんだろう・・・」と子どもと顔を見合わせる。鬼が「ヒュー、風の音」というとL 1「よかったー、もう一回寝よう」と声をかける。「トン トン トン」「なんのおと?」とリズムカルな掛け合いを楽しむ(j)。最後に「おばけの音」の答えに起き上がり近づいてくるおばけから逃げようとする。母親の手を引いて安全な場所に連れて行こうとする子どももいる。L 3「ここが安全だよ」といって三段舞台の上が安全であることを伝えると、皆が舞台の上に逃げ込む。おばけがいなくなったことを確認し、L 1「は一、良かった。じゃあ遊ぼうか」といって分化活動に入る。

ここでは、6月に初めて《あぶくたった》のわらべうたに触れた子どもたちが、11月の4回目になると、「トン トン トン」「なんのおと?」のやり取りを楽しむようになり、一人ひとりの子どもが活動に見通しを持ちながら積極的に関わるようになっていく様子が読み取れる。わらべうたに共通する音楽的特徴として、比較的短い旋律が何度も繰り返されることが挙げられる。初めて《あぶくたった》のわらべうたに出会った子どもたちも、保育者や親が柔らかい声で繰り返し同じ節を歌うのを聴き、意味は分からずとも自ら口ずさむようになり、声も徐々にそろってくる(f, g, h)。とりわけ2～3歳の子どもたちにとって、この繰り返し聴いたり歌ったりする意味は大きいと考える。耳で聞いて歌を真似ること、目で見て動きを真似ることは子どもにとって非常に意味深い。たとえ空間的に離れた

ところにおいても、歌声が聞こえると注意を向けたり (6)、音の空間を共有することで周縁的な参加を実現している。4回目の実践では、子どもたちの歌声は確実に変化しており、繰り返すこと、模倣することが自らの表現を生み出す原動力になっていることが伺えた。また、活動のはじめに手をつないで円になり大きくなったり小さくなったりを繰り返すことで (5)、次のわらべうたで円になる動きにスムーズにつないでいる。親・子・保育者が手をつないだ状態で節の抑揚とリズムに合わせて声と身体の動きを同調させることは (f, h)、集団性を高める大きな要因になっていると考えられる。同様に、「がちゃ がちゃ がちゃ」「トン トン トン」といったオノマトペの表現から状況をイメージし、他者と共有していく過程 (i, j) も集団活動の充実につながっている。さらに、《あぶくたった》のように、集団で行うわらべうた遊びには、相互にやりとりを行う場面も含まれる。4回目の実践となった11月には、集団としてそれぞれが役割をとることが出来始めており、「トン トン トン」―「なんのおと？」のリズミカルなやりとりは子ども同士でも楽しむようになっている (j)。回数を重ねたことで、やりとりの部分にもアレンジを加えた自発的な表現や節回しがみられるようになる (7、8、9、10、11)。音程やリズムが規定された歌ではなく、節回しやリズミカルなやりとりを楽しむわらべうただからこそ、子どもたちの自発的な活動を促進し、子ども同士のかかわりも活性化していると考えられる。このような活動の展開にはリーダーによる3つの機能が複合的にはたらくことが不可欠だが、本事例では音楽が主に「内容性機能」および「関係性機能」を担っており、そのことが集団活動をより発展させ、多様なかかわりを生み出し、関係性の広がりにつながっていると考えられる。

(3) 事例3【音楽会を楽しむ】

活動も後半の③集団拡大期に入ると、保育者たちによる劇や、親グループによる楽器演奏の鑑賞も経験しており、観客・演者という役割分化や、やりとりを楽しむための素地ができてきて、合同活動では「音楽会」も行われる (表2 ※3を参照)。一般的に音楽会というと、そのために楽器や歌の練習を積み重ねて本番に臨むように捉えられるかもしれないが、本活動では、見立て遊びや、やりとり遊びの延長として展開される。子どもグループの分化活動で展開された遊びを後半合同活動につなげることで、自然な形で実践されている。ここでは2017年11月30日の事例を取り上げる。

11:45 L1「そろそろショーが始まるみたい」L2・L3が三段舞台を取り巻くように椅子を並べる(12)。L1「お客さんはこちらへどうぞ、お母さんたちもどうぞ」と伝える。母グループ分化活動から合流したお母さんたちが観客として座る。お母さんの横に一緒に座る子どももいる(13)。ストローに鈴をつけた手作り楽器を振りながら音を確認する子どもや、鈴、フルーツマラカスを両手にもって舞台へ上がる子どもがいる(k)。《おもちゃのチャチャチャ》のピアノ伴奏に合わせて、リズムカルに楽器を鳴らす(l)。観客となっている母や子ども、リーダーたちは演奏に合わせて手拍子や身体を左右に揺らして楽しむ(m)。

11:50 2回繰り返したのち、ピアノ伴奏の終わりに合わせて楽器演奏も終える。拍手をうけて嬉しそうに微笑む子どもや、観客席にいる母のそばに駆け寄る子どももいる(14)。最後は楽器を箱にしまい、《おかたづけ》の音楽に合わせて、それまで使っていたおもちゃや椅子などを全員で片付ける。

本事例の音楽会では、その時の子どもたちの興味・関心に合わせ、《おもちゃのチャチャチャ》(詩：野坂昭如、曲：越部信義)を用いた。楽器は、鈴、マラカスのほか、音が楽しめる手作り小物(ここではストローに鈴をつけたもの)を用意した。小物楽器はこれまでの活動で数回触ったことがあったが、はじめて見る手作り楽器に対して興味をもち様々に試す子どももいる(k)。楽器を選びきれず両手に持つ子どもは、鳴らしながら左右に視線を向けながら音を聞き比べているようにもみえる(k)。ピアノ伴奏のもと拍に合わせて演奏したり、「チャチャチャ」の部分のみ音を鳴らす保育者をみて真似る子どももいる(l)。この事例では、舞台上で演奏する側と観客とに役割分化するのが特徴的である(12、13)。特に楽器を用いずに歌うだけの子どもや、舞台上の子どもが楽器を鳴らすのをじっと見ながら身体で共振している子どももいる(m)。自分たちの表現が受け入れられ拍手をもらうことは、子どもにとっても喜びとなって表れる(14)。

別の日に行われた演奏会ごっこでは、観客席にいた子どもが舞台上上がることもあり、その時々で役割は変化しながら、様々な参加の形が共存している。このような観客(みる)・演者(みられる)、という役割を担う行為や、音楽に合わせて楽器を演奏する・鑑賞するという行為は、ひいては表現者として文化的実践へつながる行為といえるだろう。ここでは、音楽に合わせて歌ったり動いたりするだけでなく、楽器や音のでるモノを媒介とすることで、周辺的な子どもも参加しやすい状況をつくり、また視覚的にも聴覚的にもリズムに合わせて身体で共振することを演者・観客の両者に促す要素があると考えられる。それによって子どもの自発的な活動(表現)や、子ども同士のかかわりも生まれやすくなり、役割をもった活動がスムーズに展開していると考えられる。以上の考察から、本事例では音楽が「内容性機能」および「関係性機能」を強く果たしているといえよう。

(4) 事例4【新幹線に乗ってお部屋に帰ろう】

いよいよ1年間の活動も終盤の④集団統合・転換期になると、役割をもった遊びや空想場面での創造的なふるまいが見られるようになる(表2 ※4参照)。音楽的な活動も様々な経験してきたことを踏まえて、既存の楽曲以外に、状況に合わせて即興で音環境をつくることもある。ここでは、母グルー

プが分化活動から子どもグループ活動に合流し、後半合同活動へつながる場面において、即興演奏が用いられた2018年1月23日の事例を取り上げる。

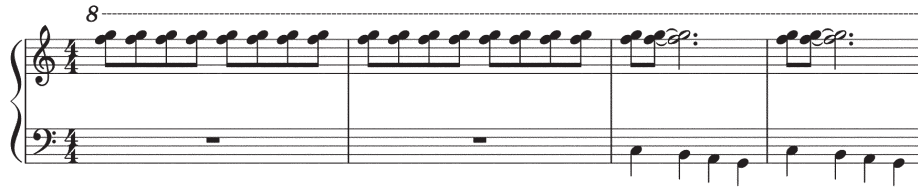
11:45 母グループの分化活動から母たちが合流し、後半合同活動につながる場面。子どもグループ分化活動の後半、三段舞台で秘密基地ができあがり、その近くにはお店屋さんが並んでいる。L2が「ここは何のお店屋さんですか？」とききながら行き来する。L1「そろそろ秘密基地からお部屋に帰りましょう。電車がくるみたいですよ」と言いながら幼児椅子を並べ始める (15)。L2・L3が母と一緒に乗るように促す。「新幹線の発車時刻がせまっています。さあみんな乗ってください」(16)、L2「乗らなきゃ、乗らなきゃ」「お土産もった?」、L1「切符をみせてください」手のひらをひろげて切符の確認をしてもらいながら次々に乗り込む (17)。L2「5番の席がまだ空いていますよ」、L3「あれ、Hちゃん、まだ駅弁迷ってるのね」(18)、周りを見回し、全員が椅子に座ったことを確認し、L1「そろそろ発車しまーす」といって並べた椅子の横に立つ。同時にピアノの高音の連打で発車時間が迫っている様子が表現され、手すりに見立てた椅子の背もたれを持つ子どももいる (n)。L2「じゃまた来てください。さようならー」と見送られながら発車する。

11:50 リズミカルなテンポの即興演奏に合わせて、L1「右にまがります」「トンネルです」と体を傾けたり姿勢を低くしたりする。子どもも笑顔で動きを真似する (o)。しばらくしてL1「お部屋までもうすぐです、あ、お部屋がみえてきました」に合わせて、ピアノ演奏の音域を高くし、音量も徐々に小さくなったところでL1「到着しました!」のタイミングでピアノ演奏がおわる (p)。

秘密基地やお店屋さんごっこの楽しさを名残惜しそうにしつつも、電車に乗ってお部屋に戻る、という空想場面で創造的にふるまい、全員で活動をつくりあげることを楽しんでいる場面である。特に決まった流れもなく、そのとき、その場で起こる即興的な活動には、音楽も既存の楽曲ではなく、即興表現を用いた。全体の流れとリーダーの動きに合わせて、電車（新幹線）が発出し、途中カーブやトンネルを経て、駅に到着するまでの様子をイメージしやすいような音づくりをしている。具体的には高音連打で発車ベルを想起させ、低音域の下降形の順次進行（譜例1参照）を徐々にテンポアップさせ電車が動き始める様子を表現することで、子どもも親も出発に備える (n)。また、道中にあらわれるカーブやトンネルを通る際は、リズミカルで明るい曲調にして楽しい雰囲気を演出することで、子どもも親も保育者の動きを真似し、イメージを共有しながら一体感を生み出している (o)。さらにそろそろ駅に到着し活動の終結が近づくと、音域と音量を変化させ、電車が遠ざかるイメージを促している (p)。ここでの即興表現には、具体的なベルの音を模した効果音的要素も含んでおり、臨場感を感じやすく、各場面のイメージの共有と動きの共振を生み出していると考えられる。保育者によって場面設定や役割付与がなされ (15、16)、子どもも創造的にふるまっている (17)。周辺の子どもも自然と活動へつながるように促している (18)。このような保育者のかかわりと音楽が生み出すイメージの共有と動きの共振によって、子ども—親—保育者が一体となった創造的な活動が成立していると考えられる。また、音楽が活動の流れを大きく規定し、様々な関係の発展を促進していることから、本

例では音楽のもつ「方向性機能」および「関係性機能」が発揮されていると考えられる。

譜例 1



2. 集団発展期には、やりとりや応答あそびが成立し始めており、わらべうたは非常に効果的である。はじめは保育者の真似をすることで、保育者—子どもとの同調・共振がみられる。それがわらべうたという言葉の抑揚に近い節とリズムを繰り返すことによって、子ども同士の同調・共振につながっていると考える。繰り返すことによって声とリズムが徐々にそろい始め、やりとりを通して遊びが展開し一体感が生まれていく様子を読み取れた。伝承文化であるわらべうたは、実践する集団や状況によって様々な形に変容することから、「内容性機能」および「関係性機能」において果たす役割は大きいだろう。

3. 集団拡大期には、音楽会という設定のもと、舞台上で演奏する役割と、観客として鑑賞する役割分化が成立した。音楽に合わせて歌ったり動いたりするだけでなく、楽器や音のでるモノを媒介とすることで、周辺的な子どもも参加しやすい状況をつくり、また視覚的にも聴覚的にもリズムに合わせて身体で共振することを演者・観客の両者に促す要素が事例中にみとめられた。子どもの自発的表現や、子ども同士のかかわりも生まれやすくなり、子ども—親—保育者それぞれが役割をもった活動がスムーズに展開していると考ええる。ここでの音楽は、「内容性機能」および「関係性機能」を強く果たしているといえよう。

4. 集団統合・転換期には、集団全体が、空想場面で役割をとりながら創造的にふるまうための素地ができている。音楽表現の要素も複合的に出現しており、保育者のかかわりと音楽が生み出すイメージの共有と動きの共振によって、子ども—親—保育者が一体となった創造的な活動が成立していると考ええる。また、音楽が活動の流れを大きく規定し、様々な関係の発展を促進していることから、音楽のもつ「方向性機能」および「関係性機能」が発揮されていると考えられる。

以上の分析と考察をふまえ、「個と集団の相即的發展」を基本理念とする集団活動における音楽の役割、その機能と作用について以下のように整理した。

- ①音・音楽によって空間を演出することで、子どもたちのイメージや動きを引き出すとともに、場面設定および活動展開を促進する。
- ②ともに同じ歌を歌う遊びを通して、ゆるやかなつながりを生み出し、同じ旋律の繰り返しによって安定した気持ちで活動が展開され、関係性の発展や拡大を促進する。
- ③音楽を通して、イメージの共有と動きの共振の経験を積み重ねることで、他者とのつながりを深め、集団活動の充実を促進する。
- ④音楽の演奏と鑑賞という役割をそれぞれが担いながら協働して一つのものをつくりあげる活動によって、個と集団の相即的發展を促進し、文化的実践へのつながりを生み出す。

5. おわりに

音楽は、音という性質上、可視化されず形としても残らない。しかし、ときに目に見えるもの以上に空間をつくり、動きを誘発し、つながりを生み出し、関係性をダイナミックに変化させたり、新たな関係性を育む力を持っているのではないだろうか。音楽だからこそ、音という空間的な響きによって周辺の参加や、ゆるやかなつながりを可能にする作用もあるだろう。このような音楽のもつ生理的・心理的・社会的機能と作用をしっかりと認識し、集団活動の充実を考える必要があるだろう。子ど

もは、他者とともに音を聴き、音に意味付けし、他者と場と状況を共有する。音を通して他者とのかかわりを深め、また同時にかかわりを通して音楽表現を深めている。この点において「個と集団の相即的發展」は音楽のもつ本質的特性とも重なる。音楽表現はかかわり合いの中でこそ深化・多様化していくということを忘れてはならないだろう。

今後は、親・子・保育者が共に音楽を楽しみ、音楽表現の喜びを経験すること最も重要なこととして根底に位置付けながら、多様な音楽経験を積み重ねることで、一人ひとりの想像力や表現力を育み、音楽的な育ちにつながるような集団活動のあり方を継続して考えていきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 安藤恭子 (2019) 領域「表現」の学びへ向かう音遊びの検討—未就園児を対象としたワークショップをもとに—, 名古屋女子大学紀要 (65).299-310
- 2) 青山真以子 (2014) 2歳児における音楽的行動の特徴に関する研究：人との関わりに焦点をあてて, 国立音楽大学, 音楽研究：大学院研究年報 (26).81-89
- 3) 青山真以子 (2015) 3歳児における音楽的行動の特徴に関する研究：人との関わりに焦点をあてて, 国立音楽大学, 音楽研究：大学院研究年報 (27).83-90
- 4) 石川眞佐江・大沼覚子 (2009) 乳幼児期における表現の育ちを支える音楽教育—保育および子育て支援における試みの検討—, 日本音楽教育学会 (編) 音楽教育学の未来, 音楽之友社, 168-169
- 5) 小松原祥子・福田明子・萩原恵里 (2017) 乳幼児を対象とした親子リトミックワークショップの事例研究, 小田原短期大学研究紀要 (47).142-152
- 6) 中村礼香・丸田愛子 (2017) 子育て支援講座における音楽遊びの実践, 南九州地域科学研究所所報 (33).65-72
- 7) 松村康平 (1968) 監修・編集 児童臨床学—関係弁証法の技法とその展開, お茶の水女子大学児童臨床研究室
- 8) 松本晴子 (2011) 就園前親子への音楽活動による支援の可能性 —大学附属幼稚園の役割をふまえて—, 宮城学院女子大学発達科学研究 (11).17-23
- 9) 吉川晴美 (2010) 集団の指導者のかかわり方, 子育て・発達支援 —地域に開く大学として共に育つ保育活動から— 第三巻, 東京家政学院大学児童臨床実習担当者グループ
- 10) 渡邊佐恵子 (2018) 2歳児と3歳児の関わりの中で見られた音楽表現：表現が伝わる過程での2歳児の行動に着目して, 子ども教育学会紀要, 子ども教育研究 (10).11-20

付記：本稿は、日本保育学会第72回大会での研究発表をもとに、新たなアイデアを付加して再構成したものである。

注

¹松村康平 (1968) 監修・編集 児童臨床学—関係弁証法の技法とその展開, お茶の水女子大学児童臨床研究室

²吉川晴美 (2010) 集団の指導者のかかわり方, 子育て・発達支援 —地域に開く大学として共に育つ保育活動から— 第三巻, 東京家政学院大学児童臨床実習担当者グループ p.17

The Role of Music in Child Care Support Activities
—From the Viewpoint of Function and Action Creating the
Relationship Between Individuals and Groups—

YAMAHARA Makiko, TAJIRI Sayaka

Abstract

In this study, we examined the role of music in group activities for children aged 2 to 3 through case analysis. This activity is practiced as part of child care support activities. As a result, the role, function and action of music in group activities based on the principle of “mutual development of individuals and groups” were organized as follows.

- (1) By creating a space with sound and music, draw out the children's images and movements, and promote scene setting and activity development.
- (2) Through the play of singing the same song together, a comfortable connection is created, and the activities are developed with a stable feeling by repeating the same melody, promoting the development and expansion of the relationship.
- (3) Through music, through experience of sharing images and resonating movements, deepen connections with others and promote group activities.
- (4) Promote the experience of cultural practice and the mutual development of individuals and groups through activities that collaborate to create one thing, with the roles of playing and appreciating music.

Keywords : child care support activities, prekindergarten, group activities, music, individuals and groups